

# 高校保有考古資料の保存と活用

狭 川 真 一

## はじめに

大阪大谷大学博物館で開催した令和6年度秋季特別展は、「部活で発掘！部活で考古！—郷土を愛した高校生たち—」というタイトルで、かつて高校生が遺跡の調査や保存運動に尽力した時代を振り返りつつ、現代の文化財保護の在り方を考えようと企画したもので、令和6年（2024）9月20日（金）～11月16日（土）の期間で開催した。

本稿はその展示を通じて思うところをあれこれと書き留めたものであるが、展示期間中に観覧者へ配布した『博物館だより』137号の原稿を元にして加筆し、再編集したものである。そのため重複する箇所が随所にみられることをお断りしておく。

## 1. 展示の趣旨

1960～70年代、高度経済成長期の日本は各地で大規模開発が行われ、多くの遺跡が失われていった。その反面、多くの遺跡が踏査や遺物採集によって確認され、辛うじて記録が残された遺跡もある。その多くは、当時の考古系クラブ（地歴部・考古学部・歴史部などの総称／市元2014）に所属した高校生たちによる自主的な課外活動＝部活であった。もちろんそこにはそれを指導する熱心な教員の存在があったことは言うまでもない。

当時の高校生たちは、壊されてゆく古墳や窯跡、住居跡の発掘を手掛け、さらに部活動を通じて考古学を本格的に学びつつ、文化財の大切さを体感するとともに、消えゆく遺跡の保存運動を展開したのである。彼らが調査や探索をした遺跡から出土した遺物には、現在でも目を見張る資料も多く、その存在は早くから知られるところで「高校保有の名品展」のような形で紹介されることも多い。ただ、今回は少し視点を変え、当時の高校生たちの活動の記録を通して、彼らの活躍が現代にどのように引き継がれているのかを考える機会にしたいと思う。

当時、こうした高校生たちの活躍はほぼ全国に広がり、各地で活発な活動が繰り広げられ、その痕跡が残されているが、今回の展示はまず、本学に近在する大阪府南部の府立高校（河南高校、富田林高校）における活動を取り上げた。また校内に展示室を持ち、現在も地歴部の活動を続ける泉大津高校には数々の資料が残されており、当時の活動を知る上で欠かすことのできないもので、多くの資料を借用した。また1960～70年代にはまだ創立されていなかった狭山高校にも貴重な資料が残されており、各地で考古系クラブが減少する時代に入ってもなお活動が続いていたことを紹介した。

## 2. 高校の活動と展示資料

### （1）大阪府立富田林高等学校（本稿では富田林高校）

現在は、大阪府立富田林中学校・高等学校として中高一貫校となっているが、設立は1901年に遡る。1948年の学制改革により富田林高等女学校（現在の河南高校）と男女学生や教員を交流して共学化し、現在に至る<sup>(1)</sup>。考古学クラブは1960～70年代に活動の中心があったようだが、資料がなく詳細は不明である。しかしその活動の痕跡は随所に残されており、採集された遺物は現在も校舎内の一画に保管され、一部は



写真1 展示のチラシ



写真2 展示室の風景



写真3 展示室の風景



写真4 富田林高校生採集の縄文土器ほか



写真5 富田林高校生採集の石器類

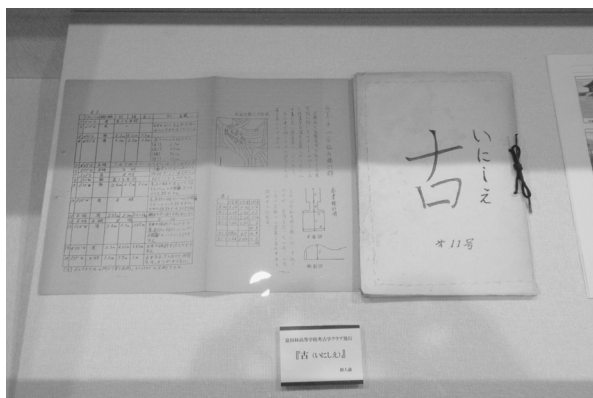


写真6 富田林高校考古学クラブ発行の『古』第11号



写真7 富田林高校遺跡分布調査カードと  
彼方丸山古墳測量図

校内に展示されるものもある。

今回借用した遺物を概観すると、富田林市錦織遺跡出土深鉢形縄文土器は、1967年に行われた排水溝設置工事の際に富田林高校の生徒によって採取されたもので、平安博物館で復原され今日に至っている。縄文時代前期のほぼ全形が判明する資料として貴重である（北野1985）。また藤井寺市国府遺跡出土の前期縄文土器片や富田林市喜志遺跡の石器類は、台紙に布を貼り、そこへ1点ずつ糸で留め、遺物の名称や分類等を記したものである。このほか、羽曳野市貝の脇古墳採集須恵器長頸壺、柏原市玉手山古墳採集須恵器短頸壺、大阪狭山市陶器山窯跡採取須恵器坏身などを展示した。

また、富田林市教育委員会に保管されていた遺跡の分布調査カード（複製品）と彼方丸山古墳の平板測量図（1969年8月の日付あり）の青焼き資料を借用、展示した。平板測量図には測量調査に参加した当時の生徒の名前が記載されており、見学者の中に自分の名前を見つけられた方もあった。またお借りした卒業アルバムに掲載されたクラブの記念写真を抜き出して、パネル展示も行った。

さらに、卒業生の方にご提供いただいた、クラブで刊行していた機関誌『古〈いにしえ〉』第11号（最終号とのこと）も借用できた。このクラブの卒業生の方々は現在も交流が続き、『古』の続編ともいえる富田林高校考古学クラブOB・OG会刊行の『古会〈いにしえかい〉』も借用し、その両方を展示させていただいた。この展示を機会として久しぶりに再会された方もあり、新会員が増えたという嬉しいお話まで舞い込んできた。また、展示室内は同窓会さながらの風景を見せてくれた日もあった。展示作業中には考えもしなかった楽しい話で盛り上がってくださったのは、副産物として大きなものであった。

## （2）大阪府立河南高等学校（本稿では河南高校）

1912年に南河内郡実科高等女学校として設立され、1948年の学制改革で富田林高校と交流して共学化し現在に至る。当校の考古学クラブは1970年前後を中心に活発な活動を実施していたようで、収蔵する資料数も多くコンテナ数は100箱を大きく超えるものである。残念ながらすでに廃部になっているため、富田林市教育委員会が遺物を中心とした資料を保管しているが、模型など一部はまだ学校内に残されている。

今回借用した資料は、現在富田林市埋蔵文化財センターに保管されている藤井寺市船橋遺跡で採集された庄内式土器甕や古式土師器広口壺、ミニチュア土器類の完形品を含む状態の良い資料群である。また富田林市新堂廃寺の採集品は飛鳥時代から奈良時代の軒瓦で、「郷土出土品」と題する遺物カード綴り一式も借用した。さらに学校の一室にも遺物等が残されており、サヌカイトの原石は長さ20cm余りの大きなものだが、残念ながら採集地点の記録が見当たらなかった。当時ならまだ、大阪府太子町と奈良県香芝市との境にある屯鶴峯あたりで採集は可能だったことから、その付近のものではないかと推察する。

さらに前方後円墳の模型がいくつか残っており、薄いベニヤ板を等高線に沿って切り抜いたものを貼り重ね、彩色を施したものである。市ノ山古墳（允恭天皇陵）、仲津山古墳（中津姫命陵）、日本武尊白鳥陵古墳の各模型を借用し展示した。また、羽曳野市観音塚古墳の横穴式石室半裁模型は、石室内部の様子を細かく再現したもので、当時は高校の文化祭で展示していた<sup>(2)</sup> そうである。

なお、富田林高校・河南高校への専門的指導は、富田林市内在住だった北野耕平氏（神戸商船大学助教授／当時）の力添えが大きい。

また1970年には富田林市内の平古墳群を開発から守るべく、富田林高校考古学クラブの協力を得て保存運動を展開している（後述）。これに関係する資料として、「平遺跡保存運動経過報告」「富田林市平古墳保存陳情書（写）」「署名用紙」、さらに街頭で配布した「平遺跡の完全保存を！」「平遺跡の問題をめぐって皆さんに訴えます！」と題するガリ版刷りのチラシ、さらに大阪府教育委員会が刊行した『平古墳群発掘調査概要』<sup>(3)</sup> 等を個人から借用し展示した。





写真8 河南高校生採集の船橋遺跡資料

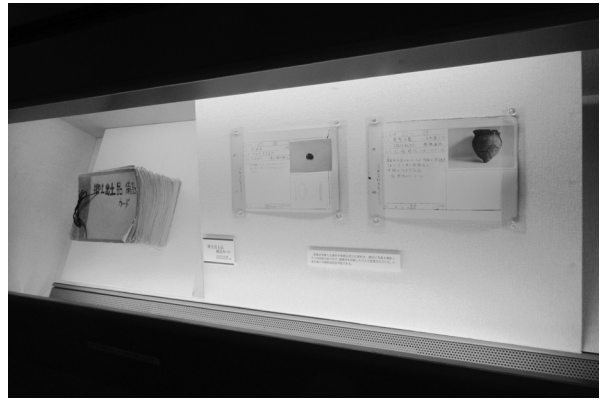


写真9 河南高校郷土出土品カード



写真10 河南高校生作製の古墳模型



写真11 狭山高校保管資料の展示



写真12 泉大津高校保有摩湯山古墳資料の展示



写真13 泉大津高校の信太山古墳群資料の展示

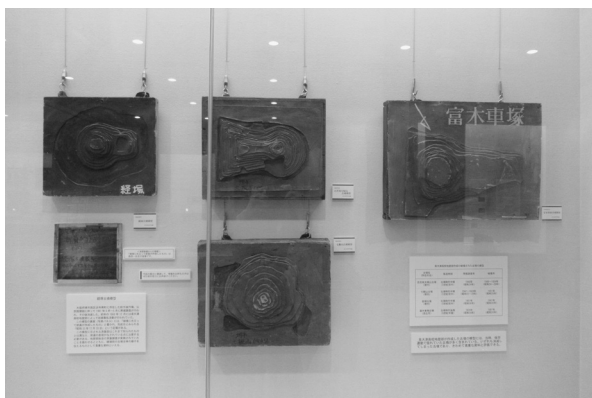


写真14 泉大津高校地歴部員作製の消滅した古墳模型



写真15 泉大津高校地歴部の新聞切抜ファイル

### (3) 大阪府立泉大津高等学校（本稿では泉大津高校）

1941年に大津高等女学校として設立され、1948年の学制改革で男女共学となり、1950年に野球部の甲子園出場を機に現在の名称に改名した。地歴部は1948年に設立され、一時期部員の減少により廃部に追い込まれそうになったようだが、その事情は新聞に掲載されたほか、弥生文化博物館が特設コーナーを設けて活動を紹介（江浦2009）するなど、周囲の支援もあって入部者も復活して持ち直し、現在も活動が続いている。1997年には教室の一部を改装して考古資料の展示室を設け、2006年には主要な遺物とその出土概要などを記載した図録（林2006）も刊行している。

現在も地歴部が継続しているだけあって、保管されている資料は膨大で、古くは池上曾根遺跡の発見にはじまり、信太千塚古墳群の調査や陶邑古窯跡群の探索では大きな成果を上げ、その関連資料も多々保管されている。さらにこれだけではなく、部員が作製した古墳模型はかなりの数に及び、巨大な陶邑の窯跡分布模型は生徒たちによって詳細に調査された証である。他にも大学教授や専門家、他校の考古学系クラブとの交流を示す書簡なども保存され、遺物の重要性にも増して埋蔵文化財行政が各地に定着する以前の活動が窺われる点は注目すべきである。

また部員の活動を支える大きな要因として、1951年から1965年の間、のちに同志社大学教授となる森浩一氏や檀原考古学研究所を経て宇都宮大学教授となる石部正志氏が泉大津高校の教員として赴任し、高校生たちを牽引して数々の成果をあげている。指導者の存在が如何に大切であるかを教えられた気がした。

なお、当校でも遺跡の保存運動は行われていた。惣ヶ池遺跡で弥生時代の住居跡を地歴部で緊急調査したあと、部員たちはその重要性を踏まえて署名活動を実施していた。幸いにも住宅公団は設計を変更して、住居跡部分を公園にしてくれたそうである（石部2014）。現在は鶴山台惣ヶ池公園として和泉市が管理しているようである。活動が功を奏した結果であり、当時の部員たちの喜びが目に見えるようである。

これらに関連する資料として、「和泉市当局惣ヶ池遺跡の90%をつぶす」と題した遺跡保存を訴える嘆願書や『和泉の遺跡と破壊』と題した小冊子、そして周辺の遺跡をパトロールして記録した「遺跡（パト）ノート」など多数の活動記録が残されている。

当校の調査成果はすでに各方面で紹介されており、その出土遺物には目を見張るものも多く、よく知られた資料も多い。今回はその中から、全体形が復原できる鰭付円筒埴輪と関連埴輪片、部員作成の模型や平板測量図を残す岸和田市摩湯山古墳の資料一式、信太千塚5号墳出土の鰭付土師質円筒土製品や同52号墳出土の須恵器類、同60号墳出土で大形の須恵器甕と器台を借用した。この器台は部員が力を合わせて復元したもので、その様子が新聞にも掲載されている。さらに、機関誌『和泉考古学』第4号は1959年の刊行であり、部員が集めた新聞記事のスクラップブックは5冊以上も残っており、特に自校に関係する記事は隈なく集めているようである。

これに加えて古墳の模型も借用した。10基以上の模型が残されているが全貌を掴み切れなかったことから、大阪府下の前方後円墳模型を無作為に6点借用した。このうち4点（堺市大塚山古墳、同市七観山古墳、同市経塚古墳、高石市富木車塚古墳）は、すでに破壊され今では見ることはできないものであった。経塚古墳模型の裏面には「破壊に先立って部員が作成したもの」と力強い文字<sup>(4)</sup>で記載されていることから、意識的に破壊される古墳を選択して作製したようである。ちなみに模型作製日は、昭和35年12月20日となっており、破壊された前年の年末である。

また、未整理の資料も多くあり、一部はコンテナに入った状態のままお借りしたが、そこに詰められた遺物は今後の部員による整理を待っているかのようなものである。さすがに地歴部が継続しているため、部員が作成した様々な記録類や発行物は廃棄されることなく膨大に残されており、その資料からは当時の部員の活動が窺われるだけでなく、それらは今も保管される遺物の重要な語り部でもある。未永く継続され、保

存され続けることを願わずにはいられない。

#### (4) 大阪府立狭山高等学校（本稿では狭山高校）

学校創立は上記の3校に比べると新しく、1980年である。1期生の入学後も校内での発掘調査が継続されていたようである。現在、考古系クラブは存在しないが、大阪狭山市教育委員会に狭山高校から移管された出土遺物があり、かつて活動があったことを物語っている。今回の展示にあたり部活動の実態把握に努めたが、詳細は明らかにできなかった。今後も探索を続けたいと思う。

なお借用した遺物は、いずれも狭山高校から近い位置にある遺跡のもので、陶器山51号窯跡、同52号窯跡、ひつ池窯跡で採集された須恵器片である。陶器山52号窯跡資料には窯壁片も含まれている。

##### 〈アンケートから〉

ここで当時の部活動に関する来館者のコメントを紹介しておこう。

「放課後になるとツルハシやスコップを担いで自転車で信太山にいった活動していました。文化部なのに体力勝負でした（70代、女性）。」「遺跡が今のように整備されていなかったの、見つけるのも一苦労（60代、男性）。」「一須賀や嶽山西麓の整備されていなかった横穴式石室にもぐっていたことを思い出します（60代、男性）。」「高校生がここまで熱意をもって発掘に携わっていたことに驚きです（40代、女性）。」など多彩だが、この中に今後の課題が見えているような気がするの、最後に検討してみたいと思う。

以上、ごく簡単に今回の展示にご協力いただいた各高校の考古系クラブの様相を垣間見たが、廃部になってしまったところは遺物だけが残されているものの、部員の活動を教えてくれる資料は乏しくなっているのが現状であり、各校のクラブ活動を何らかの形で記録にとどめておく必要があることを痛感した。そのためには元部員を探し出し、当時の記録を残しておられないかを探索し、収集し、保管するしか方法はないと思う。各校の部員たちによって集められた遺物が重要であることは言うまでもないことだが、彼らが記録した様々な情報は消滅の危機に瀕していると言える。それらは保管されている遺物を語るうえで重要なものも含まれていると考えられるので、早急に保存に向けての行動を起こす必要があると認識する。これには文化財行政サイドの認識も必要になってくるとみられ、特に廃部に伴う遺物移管の折には部員の活動資料もあわせて収集、保管していただきたいと考える。

これは大阪府南部のみの事情ではないはずだ。全国的な視野に立って、当時の高校生の活動記録を残してゆく必要性を訴えたいと思う。

### 3. 埋蔵文化財の保存運動と高校生

河南高校の活動で大きく注目されるのは、1970年に開発の危機にさらされた平古墳群（平遺跡／富田林市）の保存運動である。運動の代表者だった竹谷俊夫氏の顛末記（竹谷2016）から一部を拾い出して当時の様相をうかがってみよう。

平古墳群が開発によって消滅するという情報をつかんだ考古学クラブは、この開発に対して遺跡の現地保存を要請したが、紆余曲折の末に富田林市教育委員会（以下、市教委）は現地保存を棚上げ。これに対し部活では、署名運動を展開するという積極的な動きになった。最初は自校の文化祭（1970年11月）において生徒やその保護者に対して行ったもので、1,495名の署名を集めた。それにとどまらずより強力な体制を構築すべく、富田林高校の考古学クラブに協力の申し入れを行い、快諾を得る。その後、両校の考古学クラブは手分けして第二次署名運動を展開する。場所を富田林駅、同西口駅、喜志駅に手分けして担当し、実に6,997名の署名を集めた。さらに大阪府立高校の地歴部や考古学クラブ、考古学関係者などにも署名の協力と呼びかけた。署名を集計して市教委の姿勢を確認したが特に変化はなく、年末に開発業者の





写真16 平遺跡保存運動関係資料の展示



写真17 高校生による保存運動を伝える新聞記事

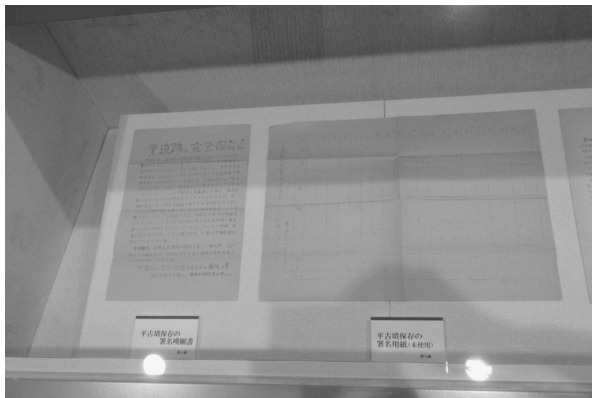


写真18 平古墳群保存運動のチラシと署名用紙

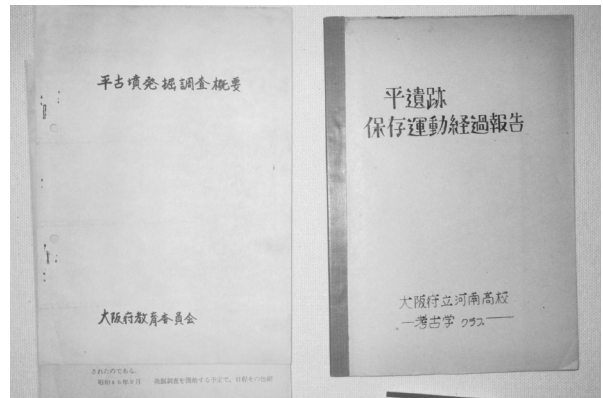


写真19 『平遺跡保存運動経過報告』と『平遺跡発掘調査概要』



写真20 泉大津高校惣ヶ池遺跡保存嘆願書

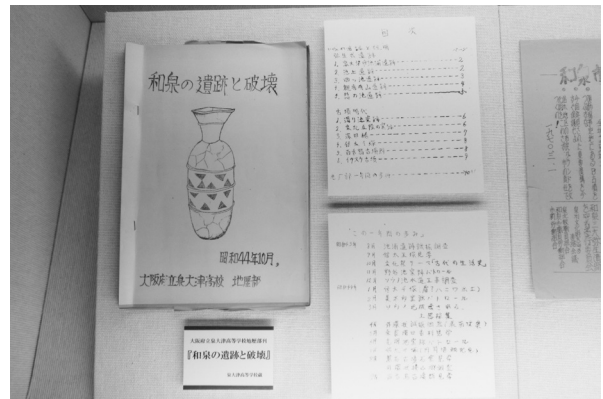


写真21 泉大津高校地歴部刊行『和泉の古墳と破壊』

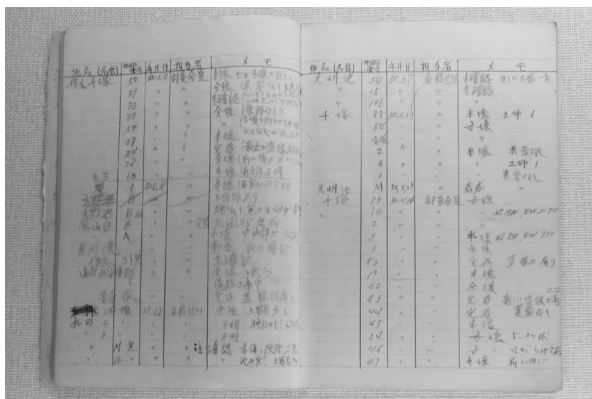


写真22 泉大津高校「遺跡（バト）ノート」

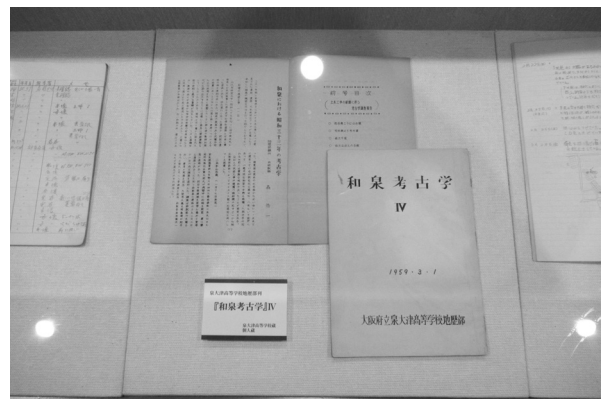


写真23 泉大津高校地歴部刊行の『和泉考古学IV』

社長と面会し8,492名の署名を添えて現地保存を訴えたが、聞き入れられなかった。

年が明けて大阪府教育委員会（以下、府教委）が測量調査を実施し、前方後方墳を含む貴重な遺跡であることを確認し、9月から発掘調査に入る予定の矢先に工事業者によって主要部分が破壊されるという事態が起きてしまった。この事態を受けて両校の考古学クラブは、保存運動から撤退するという誠に残念な決議を行わねばならなかった。

その後は、文化庁から発掘調査実施の通知を受けた府教委が調査するという流れで進み、現地説明会が開催されることで遺跡は消滅するという結果となった。

しかしその後、市教委は市内全域の遺跡分布調査を実施することとし、それを両校に依頼してきた。調査は1971年から76年の春休みに実施し、市域を南北に流れる石川の西を河南高校、東を富田林高校が担当した。その成果は大きく、重要な遺跡が多数確認されるに至った。並行して府教委からも両校に対して市内の埋蔵文化財の確認調査の依頼があったという。

保存運動は残念ながら実を結ばなかったが、行政が遺跡を具体的に把握する必要性を認識し、詳細な分布調査を実施する切っ掛けになったことは間違いない。のちに市教委には河南高校出身者が初代の文化財技師として採用されるに至っている。

例年、文化庁が発表している埋蔵文化財担当専門職員数の推移をみると、まさに1975（昭和50）年度から市町村に専門職員が入り始めている。その後は順調にその数を伸ばし、ピークの2000～2003（平成12～15）年度では都道府県と市町村の専門職員数は合わせて7,000人を超えるまでに至った。その間、文化財行政は徐々に充実を続け、システム化が進み、国や地方公共団体による指定史跡も増加。遺跡の周知化も進み、開発に伴って不時発見される遺跡は激減した。このなかで開発計画の事前に遺跡の有無を照会し、必要に応じて発掘調査を行って記録保存するという流れが確立したと言えるだろう。その中で現地保存される遺跡は決して多くはないが、遺跡保存に関する運動は下火となっていった。

#### 〈アンケートから〉

展示会中に展示に関するアンケートをお願いした中から、保存運動に関するものをいくつか紹介しておこう。

「各学校における調査結果をまとめた資料や嘆願書から、考古学に対する思いがひしひしと伝わって来た（20代、女性）。」「今ではあまりないようなエネルギーを資料から感じました。」というのは、遺跡保存運動の資料に興味をもったという20代の男性。若い世代がこのように感じてくれたのは嬉しい限り。「当時、高校生だったみなさんの志の高さに心動かされております。文化を守る、というのは理屈ではなく、まさにこういうことなのですね。」とは、50代男性のご意見。合理的、効率的なことのみに良しとし、経済最優先に動いているように見える昨今の政治や社会を、こういう機会を通じて再検討していただけたら展示の意義は十分に果たせたと思う。

このほか、「高度成長期の開発で、多くの文化財が失われたことを改めて認識するとともに、当時の高校生が主体となって保存運動をしていたのが興味深かった（50代、男性）。」「遺物だけでなく、このような活動資料も後世に残していかなくてもならないと思いました（60代、男性）。」「開発に伴う行政発掘が多い近頃、貴重な遺跡の保存と存続を求めて活動した学生方の探求心と熱意を身近に感じ、自身も発掘調査に携わる者故、初心や丁寧さ、熱意といったものをもう一度思い起こす機会になった（30代、男性）。」などのコメントを頂戴した。拙い展示であったが、こうしたご意見は今後の活動につながるものと信じていたい。



#### 4. この展示を企画して思うこと

当時の高校生たちの積極的な保存保護活動なくして、今のような幅広い文化財行政の成立は無かったといっても過言ではなかろう。現在の文化財行政は一朝一夕で完成したものではなく、多くの人たちの努力の蓄積によって出来上がったものである。もちろんこれからも文化財行政は各世代を担う人たちによって進化し続けるであろうが、その歴史の中にこうした高校生の活動があったことを忘れないで欲しい。

しかし、文化財行政の整備に伴って遺物を拾い集めて記録し、新たな遺跡を認識する分布調査は影を潜め、発掘調査は行政主導で実施され、まさにプロの世界で実施される場所となり、高校生からは遠い存在となっていた。アンケートのコメントにあったような「横穴式石室にもぐっていた」というような環境は失われ、「(遺跡を) 見つけるのも一苦労」せずとも標識に従って確実に到達することができるようになった。つまり、身近にあった古墳や住居跡、窯跡などは管理された空間で保護されるようになり、自由に野山を駆け回り身近に触れられる存在だった遺跡は、高校生たちからは距離ができてしまったのかも知れない。

このことが示すように、文化財行政の充実と相対するように考古系クラブは各地で部員数を減らし、廃部になってしまったところも多い。このような書き方をすると行政主導の文化財保護が、高校生から夢を奪ってしまったかのように見えてしまうが、文化財の側からするとまずは保存保護が図られてこそ次への継承がある訳であり、この方針は間違っていない。これからは、新しい接点を模索する時期にきていると言える。各地で高校生向けの研究発表会や各種イベントが実施されているのは、次世代の活躍に期待する人たちによる企画だろうと思う。

しかしその反面、苔むして崩落しそうな石垣が残る山城や落ち葉を払い除けると礎石が所々から顔を出す寺跡があっても良いのではないか。安全性の問題は残るが、木立の間にぽっかりと口を開く「潜れる石室」は封鎖しないで欲しいし、懐中電灯片手に匍匐前進で入った玄室に家型石棺を確認した時の驚きと感動は、世代を超えて体験して欲しいものである。こうした環境の維持は、すべての面で管理が進む現代社会の大きな課題ではないかと思う。

部活で保存運動を展開した竹谷俊夫氏は、1973年刊行の自校の自治会雑誌に次のようなコメントを書いている。高松塚古墳発見のニュースを受けて「壁画を見ようとする人は見る権利だけを主張し、保存する権利を忘れていたようである。その意味では当時の処置は保存に万全を尽くすということで正しかったかもしれないが、この壁画が保存のあまり先々のことばかり考えられ、今生きている我々自身が近い将来にも実見できないということであるならば、保存という言葉の意味が分からなくなり、今後の文化財保存問題をよりいっそう難しくさせる一因になるのではないかと心配するのである。」と（竹谷1973）。現代の文化財行政が保護と活用の間で揺れ動いていることを、半世紀前にすでに指摘している。

これはまさに現代的な課題であり、小学生から高校生たちに（昨今では大学生も）いかに本物の遺跡や遺物に触れ、過去を身近なものとして認識してくれるか、整備された遺跡を上手く活用して、いかにそれを実現するかが今後の課題として浮かび上がってくる。理解者が増えないと文化財の次世代への継承も難しくなる。同じ資料と認識できるなら廃棄せよとの命令を下す首長まで登場してしまった昨今、かなり喫緊の課題として若い人々に郷土を愛する力を身に付けてもらい、その資源である文化財を大切に思う気持ちを養ってもらおう環境作りを急がねばならないのではないかと思う。

本展示を企画するにあたり、次の方々にお世話になりました。記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

平島将史（泉大津高校）、山田正晴（河南高校）、白江人智（富田林高校）、中岡 司（富田林高校OB、大谷学園評議員）、松川利隆・松川栄子・石田優子・大畑雅代・小泉 融（富田林高校考古学クラブOB）、

竹谷俊夫（河南高校考古学クラブOB・元大阪大谷大学）、白石耕治（大阪狭山市教育委員会）、鋤柄俊夫（元同志社大学）、山田邦和（同志社女子大学）、今井涼子（九州国立博物館）、山崎頼人（京都文化博物館）、青木昭和、林 正樹、角南辰馬、渡邊晴香（富田林市教育委員会）、江浦 洋、武田浩子、芝 幹（公益財団法人元興寺文化財研究所）、大阪大学考古学研究室、大阪狭山市教育委員会、富田林市教育委員会、羽曳野市教育委員会、2024年度博物館実習生

またこの展示期間中および春季に実施した「大とんだばやし展」において、積極的に来館者に話しかけ、様々な情報を引き出してくれたのは本学博物館の池田千尋学芸員である。おかげで思いもよらない貴重な情報や資料が集まり、それがまた来館者を動かし、貴重なコメントもいただけた。そういう人の繋がりが出来てくる中で、個人的には学生時代に発掘現場を共にした方と約45年ぶりに再会することもできた。この人の輪の広がりの中に、現代の大学生や高校生も巻き込みたいものである。

### 【注】

- (1) 各高校の沿革は、それぞれのホームページ等を参照して記載している。
- (2) アンケート（河南高校卒業生で考古学クラブOB、60代、男性）より。
- (3) 通常の発掘調査報告書とは異なり、簡易なホッチキス留めのもの。
- (4) この文字部分が森浩一先生の直筆であることを山田邦和先生にご教示いただいた。

### 【引用参考文献】

- 石部正志2014「大阪府立泉大津高校地歴部の活動」『全国高等学校考古名品展』九州国立博物館
- 市元 壘2014「高等学校と考古学」『全国高等学校考古名品展』九州国立博物館
- 江浦 洋2009「郷土の歴史―泉大津高等学校地歴部のあゆみ」『大阪の宝物―出土品が歴史を語る―』大阪府立弥生文化博物館
- 北野耕平1985「考古編」『富田林市史』第一巻、富田林市役所
- 竹谷俊夫1973「高松塚古墳発掘の意義」『河南高校自治会雑誌』72 Vol.18、大阪府立河南高等学校自治会
- 竹谷俊夫2016「富田林平古墳保存運動の顛末」『志学』第47号、大阪大谷大学
- 林 耕二2006『泉大津高校考古資料室図録』大阪府立泉大津高等学校（地歴部編）